

9、西 義雄

「昭和初期の学園」

日時 一九八三年九月二八日

場所 浦水会館・百周年記念事業事務局

聞き手 田中菊次郎（百年史編纂室）

小野沢主計（百周年記念事業事務局次長）、鈴木俊光（同主任）

西^に義雄氏^{ぎゆう}略歴

一八九七（明治30）年4月7日 兵庫県朝来郡朝来町伊田市場にて父古田丈三郎、母きょうの五男として生
る

一九一一（明治44）年10月 得度して臨済宗妙心寺派の僧籍に入り、同時に西惟恭と養子縁組して西義雄と
改名す

一九一二（明治45）年4月 臨済宗妙心寺派立花園学院入学、一九一七（大正6）年3月同卒業

一九一八（大正7）年9月 第一高等学校入学、一九二一（大正10）年3月同卒業

一九二一（大正10）年4月 東京帝国大学文学部印度哲学科入学、一九二四（大正13）年3月同卒業（卒業

論文「大般若経に於ける空の研究」

一九二四（大正13）年5月 東京帝国大学大学院入学（特選給費生に選定さる）、昭和4年まで在学

一九二五（大正14）年4月 東京帝国大学文学部印度哲学科副手を嘱託さる

一九二七（昭和2）年3月 同依願退職

一九二七（昭和2）年4月 東洋大学教授に任ぜられ、木村泰賢博士の後任として印度哲学倫理学科四年の

印度哲学史を担当す

一九三五（昭和10）年4月 改めて東洋大学文学部教授に任ぜられ、印度哲学・梵語・仏教学等を担当す

一九三六（昭和11）年4月 大倉山精神文化研究所所員を委嘱さる

一九三七（昭和12）年4月 東洋大学評議員に選出さる

一九四一（昭和16）年4月 東洋大学維持員に選出さる

一九四四（昭和19）年4月 東洋大学学生主事

一九四五（昭和20）年7月 東洋大学幹事長に就任（昭和21年6月まで）

一九五一（昭和26）年7月 学校法人東洋大学理事（教務担当）に選出さる（昭和30年6月まで）

一九五二（昭和27）年10月 日本宗教学会理事

一九五四（昭和29）年5月 『原始仏教に於ける般若の研究』により、東京大学より文学博士の学位を授与さる

一九五六（昭和31）年4月 東洋大学大学院文学研究科委員長（昭和35年1月まで）

一九五六（昭和31）年4月 財団法人大倉精神文化研究所理事

一九六〇（昭和35）年7月 東洋大学附置東洋学研究所所長に選出さる（昭和38年1月まで）

一九六一（昭和36）年1月 東洋大学文学部長に選出さる（昭和38年1月まで）

一九六八（昭和43）年3月 東洋大学停年退職（一年延長されて退職）、東洋大学名誉教授兼任講師となり

出講

一九七〇（昭和45）年4月 勲三等瑞宝章を授けらる

一九七二（昭和47）年7月 大倉精神文化研究所理事長兼所長となる

主要著書

初期大乘仏教の研究（大東出版社 昭和20）

原始仏教に於ける般若の研究（大倉山文化科学研究所 昭和28）

大乘菩薩道の研究（編、平楽寺書店 昭和43）

阿毘達磨仏教の研究（国書刊行会 昭和50）

大毘婆沙論（国訳々註、共訳、大東出版社 昭和44・9）

阿毘曇八鍵度論（国訳々註、共訳、大東出版社 昭和9）

阿毘達磨俱舍論（独訳々註、大東出版社 昭和10）

俱舍論光記（独訳々註、大東出版社 昭和52）

——ずいぶん前から西先生のお話を伺おうと思って、機会を待っておりましたが、この前は流れてしまつて、やつと九月になつて実現いたしました。お忙しいところをありがとうございます。

昭和からの大学の歴史の同時体験者は西先生以外はいらっしゃいません。ほかの人は三十年が最高で、西先生がいちばん古いわけですから、そういう時代のいろいろな話をわれわれに残しておいていただきたいと思います。何を話していただくかを考えて、一応こちらで設問を立てたんですが、それ以外にもお話があれば、どんどんお出してください。

先生が東洋大学においでになつたのが昭和二年ですが、東洋大学にこられたころの東洋大学はどういうふうな状況だったのか、あるいは先生が来られるときに、東洋大学とはどういう大学だと考えておられたかという辺から始めると、当時の東洋大学が出てくるんじゃないかと思ひます。

家庭的な、いい学校

西 その時は京北と東洋とが一緒でしたね。京北の門を入ると、京北の入口の両脇に柳がずっと植わつていたので、この前を通ると、東洋というのは柳でわかつたんです。まだ両方とも木造でしたから、そんなに大きな建物はありませんでした。まだ右の建物はなかつたんですが、石段を上がりますと、図書館兼講堂があつたでしょう。それから、右の奥のほうに二階建ての長い建物が三つぐらいありました。田舎の小学校よりはちよつと立派だといふぐらいだったんですが、それでも学生数は四、五百いたんじゃないですか。

私の入ったときは、印度哲学倫理学科と支那哲学東洋文学科というのがありましたが、それは四年制です。あ

とは三年制で、国文と倫理関係ですね。しかし、わりにハイカラだったと思ったのは女生徒がいたことです。これは早いんですよ。東洋がいちばん早いんじゃないかな。栗山（津禰）という人を覚えていますが、あれが卒業生でときどき来ていました。

富士前町に寮があつて、東洋大学の学生が二十人ぐらいいたんです。私はそこにも長くいましたので、よく呼ばれて行きました。非常に家庭的ないい学校でしたよ。

——その寮というのは先生が入っていられた東大の寮ですか。

西 いや、臨済宗内川寮という寮が富士前町にあつて、そこに二十五人ぐらい入れたんです。そのうち二十人ぐらい、いや、十八人ぐらいは東洋の学生でした。記念祭には店を開いて、われわれを招待してくれて、おでんを食べさせたり、ぜんざいを食べさせたりした。本当に家庭的ないい学校だというのが私の感じでした。

私は大正六年に高等学校を受けるといふのでのぼってきたんですが、これはおもしろい学校だと思ったことがあるんです。早稲田に入ろうか、この柳の学校に入ろうかと思つたことがありますが、一年勉強して一高に入つたので、そのままになりました。

学生もその時分の学生は羊羹色の羽織を着て、長い紐を結んだ羽織袴の学生が多くいましたが、三沢元貫、国広萬里などもその仲間ですよ。（笑）そういう感じで、非常に家庭的でした。私が来たときは、教授室が木造の二階にあつて、仏教の渡辺海旭、それから梵語の荻原雲来、宗教学のほうでは島地大等、常盤大定、漢文学のほうでは古城貞吉、詩人でいつも袴をつけ靴を履いて、時には三味線を持ったりしていた漢詩人小見清潭先生もお

られました。それから、高島平三郎、藤岡勝二。私なんかまだ三十になったばかりでしたが、われわれ若い者を相手にして、古城貞吉先生が「常盤大定君は」なんてしきりにやるんですよ。常盤大定とか島地大等先生など、そういう人々のことを教授室で遠慮なく話してくれました。

そういう意味で、だれも威張っている者がいないんですよ。非常に家庭的でした。いまから思うと、藤岡さんなどは東大の偉い教授ですし、古城さんも錚々たる教授ですが、そういう人が私のような小僧をつかまえて、非常にやさしくいろいろなことを話してくれました。中島徳蔵という倫理の先生もときどきやってきましたが、あの先生は口は悪いけれども人のいい先生でした。そういうのが私の記憶です。

——先生が来られたのは、中島徳蔵先生の学長時代ですね。

西 いや、まだ学長になっていませんでした。昭和二年ですから、学長事務取扱です。

——昭和三年に大学令による大学になっているので、先生が来られたころはその準備などがあつたと思いますが。

西 私が来て、予科ができたのが昭和三年ぐらいです。まだ学部はできていませんでした。私は印度哲学倫理学科の四年生に印度哲学史を教えていたんですから、六年の三月までその学科を受持っていたわけです。私の友人に立正大学の学長になった坂本幸男というのがいたでしょう。あの人も印度哲学倫理学科三年の先生で来ていました。花山信勝君もこの三年を教えておられた。この印度哲学倫理学科は昭和六年三月で廃止になったので、私もこれでやめなければいけないのかなと思っていたら、中島徳蔵先生に呼ばれて「お前はもう少し続けてやれ」

と言われました。「仏教をやる者は倫理学もやるだろうから、実践道德をやれ」という命令ですよ。それでは給料が少し足りないだろうからといわれて、専門部の倫理教育科で印度哲学をやることになり、また夜学の東洋倫理史もやらせられました。

——倫理学教育学科に予科があったんですね。

西 人数は少なかったんですが、そういう学科もありました。

——そのあたりで文化学科が廃止になるんですね。それから、倫理学東洋文学科というのが二部にありました。

西 一部と二部とあり、私は二部の東洋倫理として東洋哲学史を教えたんです。私は実践道德を昼間に二コースやって、それから経国科（前は拓殖科といった）とかいうところで仏教概論。夜学、いまの二部で、東洋哲学史を教えて、それでなんとか口つなぎができました。それは中島徳蔵先生の言いつけです。ですから、ほかの就職口を探さなくてもよかったわけです。

藤岡勝二博士排斥のいきさつ

——大学令による大学の新学長のことですが、言語学の大家藤岡勝二博士がなることに決まりかけていたんですが、学友会の反対で、中島徳蔵が正式に大学令による大学の学長になったんですね。

西 それははっきり記憶にありませんが、私が先生になったときは中島さんは学長事務取扱でした。その間に藤岡勝二さんがいらっしやったかもしれません。

——藤岡さんが学友会に反対されたというのは何かご記憶がありますか。

西　　ないんです。ひよっとすると、その前に排斥された境野黄洋学長の時分の関係が藤岡さんのほうに響いていたかもしれません。中島徳蔵さんは反対のほうですから。勝二さんはひよっとすると宗門関係がおひがしの関係かな。何か追い出しのほうには加わっていなかったように思いますよ。その関係じゃないですか。私ははっきりとは知りませんが。学友会の反対ということだったら、たぶんそういう関係でしょう。まだ生々しいときです。私はなぜ境野黄洋さんを知っているかというと、先ほどこいつたように、東洋大学にたくさん友人がいて、反対派と賛成派と両方いるんですよ。なんとかかんとか言っていましたから、そのうわさですね。もう一つは、柳井正夫というのがいて、あれがよくその時分の話をしてくれました。どうも先生方も境野派と反境野派の二派に分かれていて、中島徳蔵とか島地大平等が追い出しをやったんだと聞いていたんです。

藤岡さんは立派な先生だったんですが、たぶんそういう関係が校友に……。そうでなければ、校友が反対するということはありませんからね。

——反対したのは学友会なんです。学生の会です。

西　　ああ、学友会です。黄洋さんが辞めたのが十四年で、なんとかという先生が一年学長になって……。

——それは岡田良平先生です。

西　　あの人は文部省に行きましたからね。昭和二年だと学友会にまだ反対派に回った有力者がいる時分です。

学生はきびしい先生が懐しい

——藤岡勝二さんは学生に対して非常に厳しかったということはなかったんですか。

西 それは厳しかったです。先生の国文法で落第しそうになって閉口したのがたくさんいました。藤岡勝二さんは国文法をやっていたでしょう。私も東洋大学の学生諸君といっしょにいたから、国文法の難問を聞かれていますね。「あの先生はきついから、どうだい、これ」なんていって、文法を聞かれたりして……。 (笑) どのくらいきついかわかりませんが、とてもきついという話でした。「藤岡さんので落第する者は多いよ」なんていってね。

——そういうことも少し原因になったんでしょうかね。

西 それまではわかりませんが、大きな理由はさっき言ったようなことじゃないかと思いますよ。というのは、点数がきついから先生を排斥するような悪質な学生は、私が知る限りはいなかったんです。むしろ、きつい先生にはたいへん親しみを感じていたと記憶しています。たぶん、境野黄洋先生のとくに教職員が二つに分かれたのが、あとをひいたんじゃないかと思います。そういう点ではいい学生のように思いましたよ。

たとえば、徳蔵さんもとつてもきついんです。もうさんざん怒鳴るんですよ。ところが私が加藤精神学長のとく一緒に理事をやっていた、東京都立の中学校の校長をしていた人がいたでしょう。東京七中か何かの校長をしていました。

——高盛義雄さんじゃないですか。

西 ああ、高盛君。あの連中が集まっていたときに「きつい先生と言えば、中島徳蔵さんには叱られてばかりいた。ところが、卒業してからは懐かしい。いい先生だった」といっていました。だから、そういう感じの学生

が多かったです。きつい先生を決して恨まない。藤岡勝二さんともう一人きつい先生がいました。

話は別ですが、私が一高にいたときにドイツ語にきつい岩元禎先生がおられ、とても落第が多い。ある時、私のクラスに、注意点を与えるんです。「何々君、五点」と、五点が半分ぐらいいたから、これは十点満点の五点だから五十点だなど思っていたら、「何々君、十点」と。十点が出てきたから、おや百点満点の五点か？とビツクリしたのですが、そういう先生がいました。それは有名な先生ですが、私にとってもその先生が非常に懐かしいんです。時代感覚として、学生は先生がきつくても恨むようなことはなかった時代だと思いますよ。

大学昇格で、給料から寄付金

——大学令で昭和三年に大学になりますが、文部省に供託金を五十万円預けるという決まりになっていたわけです。五十万円をすぐ用意することがなかなか難しく、いろいろ苦勞して昇格にこぎつけますが、そのあと供託金などで借金ができた上に、大学の体裁を整えるために三号館とか図書館を造らなければならなかったということがありました……。

西 私 は木村泰賢先生の後任として来て、いまなら講師ですね。でも、教授と言いましたよ。教授で来たんですが、二年目の昭和三年ごろから教授会が開かれるようになって、いまの話が出たんです。寄付しろと言うんですよ。私は二十五円もらっていたんですが、そのうちから五円出しました。八年ごろまでずっと寄付していましたが、最初は二十五円の五分の一ですね。教授会があつて、五分の一ぐらいは給料から寄付しろと言われて、それだけ取られていました。

——昭和八年までですと、五年間ぐらいですか。

西 五、六年です。まあ、五年でしょうね。そういうことがありました。

——それは全学がそうだったんですか。

西 ええ。教授会で決まったんですから。そのときは中島徳蔵さんともう一人だけだったか、一所懸命学校の困難を述べて、どうかしてくれというので、やむをえない、そうしましょうということでした。妙なもので、そういうときの教授会だけは覚えています。

文化学科の廃止

——昭和五年に専門部の文化学科が廃止になっていますが、なぜ廃止になったのかということについて、何かご存じですか。

西 それはあまり覚えがないんですが、たぶん予科との関係じゃないかという感じがするんです。

——私は覚えていないことではないんですが、記録によると……。記録というか、推測も入るんですが、大正十二年事件の中心学科が文化学科のようです。そういう関係で急進的な学生がそこに集まっていたんじゃないかと思うんです。そういうことも廃止の原因じゃないんでしょうか。

西 初めはいい学生が集まったんですが、そういうえば、文化学科の学生は生意気だという評判があったことは覚えていますね。だけど、なぜやめたかということは、私は直接覚えていないんです。私は木村泰賢先生の言いつけで昭和二年から仏典の国訳をやっていたので、直接な問題以外は関心を持てなかったんです。「大毘婆沙論」

の翻訳を年に三冊以上出せというんですよ。それを書物にして出すので、木村先生のところへ行つて、木村先生がテキストを読まれ、私の書き下しを読んでいました。それで忙しくて、ようやく学校へ来させてもらうぐらいのことでしたから、あまり詳しく知りません。

昭和五年ごろまでは、印度哲学倫理学科で哲学史を教えに一回しか来ていませんからね。私が本当に大学を知ることになったのは、昭和十二年ごろからです。

——昭和十二年ぐらいから専念されるようになったわけですね。

西 そのとき教授・評議員になりましたから。なりました、じゃなくて、ならせられたんです。若い者が二人ほど評議員になったんですが、橘高（倫一）君もそうじゃなかったかな。

女子学生のこと

——さつき女子の話が出ましたが、昭和八年に文学部にも女子を入れることになりましたね。

西 昭和八年じゃなくて、大正六年に入っています。

——女子が最初に入学を許可されたのは、そうですね。大正五年ということになっています。

西 栗山さんが入ったときです。学部に入るようになったのが昭和八年ですね。それまでも女子学生はたくさんいましたよ。たくさんというほどでもないけれども、女子学生がおでんを売るのを手伝っていました。

栗山さんのときは少なかったんでしょうが、私の二人の友人の奥さんなども二人ともこの卒業生です。

——女子はやはり優秀な人が集まったようですか。

西 その点は私はあまり知らないんですが。

——当時東京の中で学部に入るといえるのはなかったわけですからね。

西 そういえば、吉田隆の奥さんなんていうのは優秀ですよ。吉田愛子は目白の女子大学で一番か二番ということでした。東洋大学もきつと一番で出たんでしょう。そのときは仏教学科と言ったかな。そういえば、いい学生がいましたね。

——女子も仏教学科とか、そういう方面にも行ったんですか。

西 男子、女子の別なしに教えていました。ほかのクラスは知りません。

——やっぱり女子は国文が多かったんじゃないでしょうか。

西 国文が多かったのは、いい先生がいたからです。藤岡勝二さんは言語学ですが、藤村作さんも評判が良かったです。東大の教授になって『源氏物語』を中心にやった島津（久基）さんもいました。あの奥さんはこの学生ですよ。島津さんが自分の奥さんにするぐらいだから、いいのがいたんでしょうね。その当時は珍しかったんです。ただし女性のことになると、私は苦手だから、さっぱり……。 （笑）

——文化学科などができて、女子がたくさん入ってきて、当時ほかの大学からうらやましがられていたというんですよ。非常に女子も活発に動きましたし……。

西 だから、大正時代は全く珍しかったんですね。

——このあたりは学長さんは中島先生から高橋順次郎先生に変わっているんですね。昭和六年七月と書いて

あります。

西 中島さんが六年の六月に辞めて、高楠先生になったんです。

——その一年前ごろに、京北実業が焼けているんです。木造でしたから。昭和五年十一月と書いてありますが、これはたいへんだったんでしょうね。

西 それは覚えていないんだけど、焼けたことは事実です。その時分は京北と同じ財団ですから、聞いているはずなんですが、しかしその時分はまだ私自身財団の事情を聞くほどの状態ではありませんでした。

——これも夜でしょうからね。昼間だったとしても、先生方は一週間に一ぺんぐらいしか来ないわけですから、そこにいなければ……。焼け跡は見たでしょうけどね。

西 焼け跡は知っています。

——焼けた実業の校舎は、恐らく門を入れて右手にあっただしょうね。

西 ええ、右手です。木造でした。

——これも火災保険でいまの鉄筋の建物ができたわけですね。高楠学長は昭和六年からで、藤村さんが九年からですね。そのころやっと講堂ができるわけです。

西 高楠先生になっていよいよ講堂を建てることになって、続いて給料から寄付しろということになっていたのです。(笑)二十五円もらったのは一年ぐらいで、あとはみな天引きです。昭和六年の四月からは私ももう少しもらっていたでしょうね。実践倫理二科目と印度哲学、それから夜学の中国倫理と四科目出ていたんですが、

どのぐらいもらっていたか忘れてしまった。講堂を建てるから寄付しろと言われたことだけは覚えていますが、いくら寄付したかは覚えていません。

社会事業科とこども会

——さっきの文化学科と並んで、社会教育社会事業科というのがあったんです。

西 朝原梅一さん（卒業生で、当時、教授で理事をやっていた）という人が熱心で、その人が社会事業科を始めたと思います。それは大正時分からあったんですよ。

——大正十三年三月から卒業生が出ていますね。

西 やっぱり文化学科と同じぐらいじゃないんですか。夜学です。私の友人でいまでも生きている野村徹翁というのは、その第一回の卒業生で、伏見の地蔵院にいます。まだ元気でいるはずですが、寮に一緒にいました。その時分の社会事業科の女性にもなかなかいいのがいましたよ。珍しい学科ですからね。朝原さんのときの東洋大学の子供会は有名で、たいへんな子供が坂の下のほうからもやってきました。

——子供会というのは東洋大学子供会ですね。白山でやったんですか。

西 そうです。この上で。

——『観想』なんかにそのプログラムが載っています。

西 そうですか。私も一、二回出たことがあるけれども、たいへんな子供でした。記憶に誤りがあるかもしれませんが、講堂が建ったときにやったのなんかは、小さい子供が三千人ぐらい来て、二階でもなんでも鈴なりに

なって、満員なんです。たいへんな子供がこの辺にいるもんだなと思いました。(笑) 東洋大学の子供会はいたいへんなものだとか外部でもいつていましたよ。

——社会事業科と関係があるんですか。

西 朝原さんに聞いてもらうとよくわかります。子供会の会長か何かでしょう。

——昭和九年ですと、もう大講堂は落成しているころですね。

西 その前から子供会をやっていたんですが、ぼくの覚えていいるのはその頃のこと。

——昭和三年の子供会のプログラムがあります。

西 なかなか盛んでした。関寛之さんも知っています。始めたのは飯田堯一さんだと思いますよ。

——そうですね。大正十二、三年ごろから始まっているわけですから。ところで塚本哲さんも十五年に社会事業科を出ておられます。

西 ああ、塚本さんもおられました。今は先生でしょう。

——教授になりました。専門部では文化学科と社会事業科が当時非常に有名だったわけですね。

西 それは評判でした。あまりないものですかね。野村君は苗字は変えたかもしれませんが。山本サクというのもそうですよ。これは私の友人でこの講師をやっていた林岱雲君の奥さんになりました。もう亡くなったかもしれませんが、静岡県に寺を持っていますね。藤井千代というのもそうです。これは藤井宜雄という人の奥さんになって、まだいます。藤井千代、山本サク、二人とも知っています。藤井はいま病気をしていますけどね。

先きの野村君はいま大沢になっています。まだ元氣です。それが最初の卒業生だったので。野村君は卒業後東京都と関係したりして、たいへん元氣だったんですよ。

——それまで講師、教授の別がなかったんですが、昭和十年に教授と講師の別を設定しています。それまではすべて教授と呼んでいたと言うんですが。

西 藤村作さんのときです。そのときは専任というのを区別して、私はそのとき学部をもっていたので、初めて専任ということになりました。藤村作さんのときに、助教授とか講師とか専任教授とかいうことを決めたように思いますよ。

——十年に『思想と文学』の編集顧問になられましたね。

西 編集顧問になってもあまりやっていなくて、橋高（倫一）君が主としてやったんです。かれは前から研究をやっていて、お前も加われと言うので、原稿を書かされたことだけは覚えています。一卷と二巻に南方の仏陀論のことを書いたのを覚えていますが、橋高君とぼくと毛塚（栄五郎）君もそうだったかな。三人か四人編集委員になったんですが、私はあまり書いておりません。

——この雑誌は相当評価されたんですか。先生方も書いておられたから。

西 そうです。主として若い連中が書いていました。

——記録によると、そのころ先生は専門部で七科目か七時間授業を持っておられて、八十四円だったようですね。昭和十年です。

西 学部にも出ていましたが、どのぐらい取っていたか覚えていません。

——昭和十年に八十四円ですから、だいぶ上がったんですね。（笑）

西 それまでは木村先生の後釜で印度哲学倫理学科四年生の印度哲学史をやって、昭和六年には中島徳蔵先生の命令で専門部もやりました。高楠先生のときにパリ語か何かで学部教授をを持ったことがあります。八年からですが、大学のほうはまだ講師です。専門部の教授で、大学のほうは講師でした。正式に教授になったのは昭和十年、藤村作先生のときです。

——昭和十年が八十四円ですが、十一年になると、学部のほうを二コース持つて、専門部も二コースとなっています。

西 七科目というのはちょっと覚えていませんね。

——そのころの授業は、やはりいまのように一時間半の授業ですか。

西 そうです。

——七を一時間半で割ると、三、四科目ですね。七科目というのはちょっと多いですね。

西 七科目ですかね。そんなに持った覚えはありませんから。〔当時の日記を調べたら「七科目」受持っていました〕

——七科目持つと、一日二、三科目持つても二日ぐらい来なければなりませんからね。

西 二十一年からは週四日来ていました。昭和十年頃は国訳のほうでまだ忙しい最中でしたが、昭和十一年ま

でやっていて、大東社という出版社にいつも行っていました。怠けると大東社をつぶすつもりか、なんていじめられていた時分です。

——昭和十二年は創立五十周年となりますが。

「五十周年」と大倉山

西 これもあまり覚えていないんです。このときは私は大倉山に行くようになりました。十一年に翻訳が終わって、大倉山に來ないかというので、十一年のいつごろだったか覚えていないけれども、大倉山に行くようになりました。

——その時分から日本精神文化研究所に行かれたんですね。

西 このときは西晋一郎博士が委員長で、盛んに研究会をやっていたので、東洋に出ない日は大倉山に行っていました。三日ぐらい行きましたかね。五十周年のときは大倉山に行っていて、柳井正夫と吉田隆が大倉山に來て、五十年史の編集をやっていました。大倉山の中腹に宿泊舎があつて、そこへ泊まり込みでやっていたのを覚えています。

——そのころ、吉田隆先生は大倉山の職員だったんですか。

西 まだ学生でした。吉田君は十一年の卒業ですか。

——十二年支那哲です。

西 だから、まだ職員にはなれませんでした。卒業生でないと所員にしなかつたんです。ときどき來ていまし

だが、柳井君の手伝いがおもだったんです。柳井正夫は大正十三年じゃなかったかな。文化学科の卒業です。さっき言った境野黄洋の排斥運動を先頭に立ってやったほうです。

大倉学長就任の事情

——大倉学長就任当時のことをちょっとお伺いしたいんですが。

西 私 は十二年に評議員になったんです。教授評議員といって、後の維持員と同じですが、校友を交えないで、教授会だけでやっていました。これはちよつと大事なことです、そのときは校友は入らなくて、教員だけで経営維持をやっていたんです。

——維持員会と性格は一緒なんですか。

西 維持員会とは言いませんでした。維持員会というのは大倉先生になってからです。評議員会でやっていて、全部教授の責任だったんです。先ほどこよつと触れた藤村作先生の場合は学生数が四百人足らずで、昭和八年の講堂設立のときの勸業銀行の二十五万円の借金がずっとたまって、利子が払えなかったんですが、藤村作さんは思い余つて、下の京北の土地を売ろうじゃないかと言ひ出した。それを校友が聞いて、非常に憤慨して、四人程の代表が私のところにやって来て、誰かこの大学の難を救ってくれる人はないか、大倉さんが学校の学長になつてくれないか、口をきいてくれないかと言って訪ねてきたんです。

私はそのとき生意気なようだけれども、次の約束ができたら話して見ようと言つたんですよ。学長を世話すると、世話した者があとで利権をむさばつて、学校を壟断するようなことに加わることがある。そういうことを君

たちがしないと約束するなら、ぼくは話してみようという約束なんです。愛沢（恒雄）君は知っていますよ。かれもやってきた一人ですから。

そういつたら、皆約束しますということだったので、こういう学校だ、学祖は護国愛理を説いたということを話したら、大倉さんは私の趣旨に全く同じだということで、内諾を得たんです。あとでまた四人やってきたので、私もそのときは出ない、君たちも出ないで偉い先生達に交渉に行ってもらってくれということにしたんですが、偉い先生というので、私が覚えているのは、中島徳蔵、高島平三郎、吉田熊次先生達です。この当時の偉い先生が三、四人で正式交渉をされて、十二年から大倉さんが事務員を連れてきて学長になりました。

以下六ケ年間、学長費も取らない。それから自分が連れてきた原田三千夫とか、牟田直などの月給もみんな研究所から出したのです。当時の学校は木造が多かったので、全部改築したんですが、その費用も大倉さんが全部出された。また、私は大倉山の所員だったから、そのなかに加わらなかつたが、専任教授制を作り大倉さんが二十円ずつ出したんです。橘高君とか、毛塚君とか、小沢（文四郎）君とか、私のほうの坂本（幸男）君ももらっていました。若い先生七、八人に月二十円ずつやるというて、専任教授ができました。

十六教授の辞職事件

大倉学長の一期のころに、小林昌治という卒業生で伯爵か何かの屋敷にいた元氣な男の提案で、寄付行為の全面的改正をやるうということになったんです。大きな主張は、卒業生が学校経営に加わらないから藤村作先生のようなことになるんだということです。これを非常に強く主張したらしいんですが、大倉さんもそれもそう

だなどいって、そういう案を作って、教授評議員に見せたんです。そうすると、怒られたらしい。私は評議員だったけれども、その評議員会には残念ながら出ていませんので、よく事情を知らないんです。古城貞吉とか、ああいう優秀な先生方がストライキをやるというので、あとでどうしてストライキをやるんだと大倉さんに聞いてみたら、新しい寄付行為では維持員に校友を半分加えることにした、それを先生方にいくら頼んでも、理解してくれないということでした。

そこで、古城先生はじめ先ほどの『源氏物語』で有名な島津久基先生など十六名の先生方が辞めたんです。優秀な若い先生が辞めたが、いくら頼んでもダメなんだよという話だけは聞きました。

——寄付行為改正案が校友会の意向を入れて作られて、それを評議員会に見せた。そのとき教員たちが反撥して、十六教授の事件が起きたんですか。

西　そうです。そのとき毛塚君は辞めなかったけれども、たいへんえらい目に遭ったといっていました。杖下（隆之）君は古城さんといっしょに辞めたんです。

——その案は、半数が校友会の……。

西　維持員は教授が六人、校友が六人ということにしたんです。私もそれを聞いて、なるほど教授が怒るのも無理はないと思いましたよ。従来は教授だけでやっていたのを、半分取られてしまうんですからね。

——その前に、校友、学友も含めて、それが学長の世話をするというときには悪い影響が出たことがある、学校を壟断して、悪いことをする、だから、そういうことがないように約束するかということを西先生が校友に

言われたんですね。

西 愛沢君など四人にね。

——やっぱりそういうことが過去にあったんですか。

西 それはほかの学校でもよくありました。私のところへ来た愛沢はじめ四、五人は、非常に素直にそれを引き受けてくれて、彼らはあとまで出ませんでした。

——その問題は、教授の採用の選考を、今までは教授会だけでやっていたのを、校友会と教授会双方から委員会での採用を決定する、教員を選考することだったと『八十年史』に書いてあるんです。

西 私はそれは知りませんね。

——それはやっぱり一連のものだと思います。

西 ぼくはそのときは教授評議員ですから、そんな問題があったら、知っているはずですよ。それはなかったと思います。評議員で決めましたよ。維持員になるまでは、校友はタッチしません。何も権利がないんです。それで小林昌治がそれでは困るというので、昭和十四年になって維持員会をつくったんです。維持員会にかけるようになって、校友もタッチすることになりました。

——そうすると、それは維持員会ができてからの話ですね。

西 そうだと思います。私は十二年に評議員になっていますから、そんなことがあったら私は聞いていなければなりません。教員は評議員が全部選ぶんです。

——大倉先生が学長になったところから、一部に反感をもった分子がいたんだと思います。大倉先生が来て改革をしたので、それが火を吹いていろいろな事件が起きたんだと思いますね。

西 藤村さんが辞められて、俗人が入ってきたというので、反感があつたのかもしれませんが。しかし、その反感が表に出なかったのは、経済的な問題と、それから学長費等を取らなかつたからです。それはなかつたと思います。古城さんなどが辞められたことについては、毛塚君に聞いていただければよく知っています。

——第三者に聞きますと、毛塚先生は恩師も辞めているんだから一緒に辞めるべきだった、だけど辞めなかつたというので、ちよつと嫌な目に遭つたということもあるようですね。

西 毛塚君は衝に當っているから、あのときの事情は非常によく知っているはずですよ。その点は聞いていただければいいんですが、私はなかつたと思います。古城さんが辞めたのは維持委員会になつたときに、校友が口出しをする、それはけしからんと非常に憤慨されたからだということです。

——校友が教員の採用について口出しするということで、十六教授が反対して辞めていった。それが表面の理由になつてゐるかもしれませんが。十二名ではなくて十六名ですね。

西 二十名近いと思つたけれども、十六名だったかな。

——偉い先生方も含めて辞めたから大倉先生が困つて、夏休み中に加藤虎之亮先生とか福井久蔵先生とか、立派な先生を連れてきて、秋の授業には支障を来さなかつたと書いてあります。

西 それはそうです。

——そのときは維持員会はできていたんですね。

西 維持員会を立てたのが表面的な問題です。

——小林昌治が頑張ったわけですね。

西 ほかの連中も頑張ったのかもしれませんが、いちばん表に立って頑張ったのは小林昌治です。その前から校友会には先生だけでやるということに反対の意見があつたんです。有力者の三沢とか柳井正夫はその一人ですよ。

——大きな原因は、藤村作学長のときに経営がうまくいかないということ……。

西 それで、校友会で相談して、大倉さんを入れたんです。上に立つ吉田熊次とか中島徳蔵という人々は反対しなかつたんですが、若い先生方に、なんだ、ああいう連中を入れてという反感があるいはあつたかもしれません。ところが、校友が今度は財団法人の規則を変えて、維持員になった。維持員になると、教授の選択にも口出しをしますよ。それは問題だったと思うんです。

——大倉学長が来られて、たいへん犠牲を払って財政を立て直されますが、原田三千夫さんというのは非常にやり手な方だったようですね。

西 あれは一橋出で、なかなかやり手でした。英語やドイツ語もできましたからね。

——それが幹事長ということですから、一切を取りしきれるわけですね。そういうことについての反撥が……。

西 あつたでしょう。しかし、それを私はよく知らないんです。そういう問題が起きたのは十四年ですか。十四年に維持員会ができて、私などはそのときに教授評議員を辞めたわけです。教授評議員がなくなつて維持員会になつたんですから、内容にはあまりタッチしてないんですよ。その時分のことは橘高氏、毛塚氏はずっとやっているから知っているはずなんですが、私はあまり知りません。十六年に改選があつて、そのとき私は維持員にされたので、それからのことはちよつと覚えています。

——その時分は学長はまだ大倉さんですね。

西 三年ずつ二期やりましたからね。

——昭和十六年という、もう第二期に入っているわけですね。大倉学長はどうして二期で辞められたんでしょうか。何かあつたんですか。

大倉学長の退任

西 大倉さんが辞めるときは高嶋米峰氏と交代なんです。米峰氏というのは口の悪い人でしたが、非常にスムーズにいきました。もう二期もやつたから私は辞める、米峰氏に譲るというので、新旧交代が非常に滑らかにいったんです。私はこれで辞める、これから私がやりますとうれしそうに二人がやりあつたのはそれが初めてで、それまでの交代劇はそういうことはなかつたんですよ。大倉さんが辞めて、米峰氏が学長になるときの交代劇は立派でした。

——米峰さんは大倉学長の反対側ではなかつたんですか。

西 反対していなかったでしょう。仲は良かったですよ。米峰氏は経済的にもなかなかやかしい人ですからね。そして、学校全体が立ち直りましたから。米峰氏が旋風を立てるようになったのは、あとですよ。安藤正純対米峰というのはなかなかきつかったんですが、大倉さんとは良かったように思います。小林昌治が米峰と大倉さんの間をとでも混ぜくり返したという感じがですね。あれは勇敢な男でした。私はよく議論をしましたが、なかなか口達者です。

——小林昌治というのは当時は校友で何をしておられたんですか。

西 なんとか伯爵の秘書みたいなことをやっていたんでしょう。

——東北の佐竹藩ですか。

西 そう、そう。佐竹藩。私も一ぺん連れていかれましたよ。何をしたかは覚えていないけれども、このなんとかをしたのはおれだなんて威張っていました。

——あのころの校友では、岡村二一、二之宮英雄、高野剛、荒木勝良、入江平作、寺本杉蔵なんていう人が小林さんといっしょにやったかもしれませんね。

西 そういう連中がいました。そういう連中はあまりよくなかったのですが、私のときに排斥しちやった。二之宮の悪口をいうと、平野宣紀の親友だから、平野君に悪いけれども、二之宮なんていうのはやり手でしたよ。

——高野剛さんというのは、ずいぶん古いんですね。

西 それも校友でやり手なんです。もう一人チベツトをやっていたのがいました。私が幹事長を辞めた次に、

杉村哲夫さんが学長事務取扱になって、その次、学長になったのは藤原猶雪さんです。杉村さんは二、三カ月でした。五月になって、七月に辞めたでしょう。藤原さんが幹事長制をやめて四学監制をつくった。そのときの学監が高野剛、荒木等です。

——四学監ですね。

西 三学監とっていましたが、その外の一人は細川（量雄）君じゃなかったかな。

——高野、荒木、細川ですか。

西 それから、加藤という英語の先生。

——加藤猛夫ですね。これは戦後でしょう。

西 そう、そう。二十一—二年です。藤原猶雪先生が学長になったときの四学監制度です。四学監とっていただけども、細川君は補助みたいなものだったな。

——三学監制度で、細川さんを入れて四学監みたいになったんですね。

西 細川君は坊さんだからそれほどくはなかったけれども、加藤猛夫はだいぶ影響を受けました。加藤猛夫という英語の先生はいい人だったんですが、人がよすぎて高野剛に操られたほうだ。

進駐軍の病院に接収免れる

私がやっていた二十年に、ここを第八軍の病院にするといってきたんです。困って、ちょうど柴田甚五郎先生が下の京北の校長だったから二人でいろいろ相談したんですが、大正大学もそうだ、ここもホスピタルになると

いうんです。そんなことはいけないということを私が日本語で書いて、加藤猛夫に英訳してもらって、第八軍に持ってってもらいました。この学校は非常に古くて由緒のある学校だ、決してつぶしてはいけない、そういうのは文化的に良くないという長い文章を英文で書いて、それを加藤さんに横浜まで持ってってもらったんです。

——進駐軍ですね。

西 進駐軍です。ああ、そういうことか、そういう由緒のある学校ならホスピタルにするのはやめようということになって、東洋のお陰で、大正大学も病院にされなかったんです。そういう意味では、加藤さんが英語がうまくいので助かりました。

——ちょっとした建物を接收して病院にしたり、進駐軍の施設にするということがよくあったんです。

西 大正大学はどうしたか知りませんが、私のところは断固として反対しました。

——それは戦後の話ですが、戦争末期になると、学生が動員であちらこちらに行くようになりますね。そのあたりのことはどうですか。先生は学生主事長をしておられて、勤労働員を……。

西 十八年まで私は大倉山の研究所の図書館長みたいなことをやったり、指導員をやったりしていました。大倉先生は十八年にここを辞められたので、十八年の秋ごろになって、神奈川県翼賛会の副会長になったんですよ。

——大倉先生がなられたんですか。

西 ええ。各県から出ている軍の協力者になったんです。そこで、陸海軍の中将以上を大倉山に呼んだりするという会がありました。研究所はだんだんやめることになって、そのときいま日本大学の教授になって活動している古田紹欽、死んだけれども国学院大学の教授をしていた神道の西田長男といった連中が私の下にいたんです。が、原田君が首を切ると言い出したんです。

古田と西田は私の下だったものですから、こういうことで困ったと報告するから、私は「首を切ってはいかん。」と申し出た。「首を切るなら私も辞める。」と言って、「首を切るということではなくて、研究ということにしたらどうか。私は大倉精神文化研究所の研究の看板を持っておる」と大倉先生にいったら、「それはしょうがないだろう」というわけです。それで十八年の十一月ごろに私は大倉山を辞めたんですが、そのとき西田と古田も辞めました。ほかの研究員はもう辞めてしまっていたんです。

そのころ、橘高君が東洋では大いに頑張っていたんですが、十九年の三月に米峰氏が辞めたんです。和歌山県かどこかに動員に行っていた学生が騒いで、卒業式のときに坂幸男などが殴られたということがあったらしい。私は卒業式に出ていないんでよく分りませんが、二之宮が加わっていたとか何とかいうことを、あとで聞きました。それは知りません。

それで高嶋米峰が「おれは命にかかわるから学長は辞める」といつてどうしても再選に応じない。そのあとで選考したのが高島平三郎なんです。高島平三郎学長の幹事長が橘高氏で、「ぼくは今度幹事長になったんだが、君は学生主事長になつてくれ」と頼まれました。私も大倉山を辞めたので、四月からなつたんですが、「どうい

うことをやるんだ」といったら、学生主事が学徒動員のところへ行つて、監督しているんですね。「それがうまくいつているかどうか見て回る役だ」というんですよ。

動員地を見て回る

そんなことでもよければやろうと言つて、私は、学生が動員先に行き、先生が主事としてついていっているところの見回り役になつたんです。そんなことがあつて、いろいろなところへ行きました。一つ覚えてるのは日立です。倉田主税さんが常任理事かなんかをやっているときです。日立に見回りに行つたら、非常に喜ばれてね。しかも、仏教科の年長の学生が三人ほど行っていたんです。

東洋の学生さんが来てくれるまでは中学生と女学生がけんかばかりしていて、なんともしうがなかった、ところが加藤というちよつと年輩の日蓮宗の話のうまいなかなかやり手の仏教科の学生と、あとの二人の学生がうまく操つて、女学生と中学生がけんかしないようにしてくれた、東洋のお陰です、とたいへん喜ばれたんですよ。もう見なくてもいいですといわれたけれども、案内はしてもらいました。今晩は海岸の宿屋へ連れていつてとんとんごちそうしますから、ということがあつた程で、非常に喜ばれました。

——日立工場ですか。恐らく水戸の先の日立多賀でしょうね。

西 あのとときは理事長は倉田主税さんだつたと思いますが、東洋はいい学校ですね、いい学生さんですわとしきりにほめられました。私は何も知らないけれども、ごちそうだけにはなつて帰ってきました。倉田さんは工学部ができたとき寄付されたでしょう。その開校式典のときに倉田さんがちよつとそういう話をしましたよ。

——日立の工場長ですね。

西 工場長でしたか、常任理事だったか、はつきり覚えていません。まだ会長ではありませんでした。

——日立のほかに、北海道とかどこかへ行かれしましたか。

西 北海道は行きたかったけれども、行けませんでした。

——毛塚先生が行ったんですね。

西 私は二十年の九月か十月に行くことになっていたが、終戦前に行きたかったのです。なぜかというと、北海道に行くと鮭があり、食糧が助かるから。毛塚君が私の前に行ったんですが、みんな北海道に行くのを喜んでね。こっちに在るより向こうへ行つたほうが食糧がいい、ワカメとか昆布とか鮭が獲れるし、おれを先に行かせろといつてね。(笑)

——毛塚先生が隊長でしたね。

西 それはあとです。その前に小沢(文四郎)君が行つていたので、彼と交代で行ったんです。終戦のときは毛塚君が行つていたんですよ。その次ぐらいに私が行くことになっていたんですが、とうとう行けませんでした。(笑) そういう笑い話もあるんです。行けないかわりに幹事長みたいなことをやらされたんです。

——勤労働員で奉仕隊がどんどん出ていったんですが、北海道なんかは何人ぐらい行つたんでしょうか。

西 人数は覚えていませんが。

——百とか二百とかいう単位ですか。そんなに行かなかったんですか。

西 そんなに行かなかったのではないでしょうか。

——五十とか六十ぐらいですか。いま田園都市線にあるところは二百人でしたね。

動員地での入学式

西 田名部隊ですね。あれは私が幹事長のときに、二十年四月入学の専門部学生を全部連れて田名部隊に行っ
たんです。二百人だと思いましたよ。

——だいたいそんな単位ですか。

西 二百人採りましたから。入学式は向こうでやったんです。そのとき私と一緒に手伝ってくれたのが荒木君
です。毛塚君も行ってくれたんですね。小沢さんもときどき行ってくれましたが、荒木君が調査してきて、あそ
こはいいですよといっていました。ぼくは行くのなら食糧の豊富なところへ学生をやりたいといったら、荒木君
が探してくれて、「田名部隊がいいですよ。」「だけど、砲弾なんかがあるから危険じゃないか」といったら、「い
や、大丈夫ですよ。アメリカ人にはわからないところですよ」というので、見にいってみました。なるほど山の中で、
外部からは校舎が一つ建っているぐらいの所です。ここなら田舎でわからないなと思って、それならここに決め
ようと言ったんです。

——そこで入学式をやったんですか。

西 入学式もやりました。皆がそこに集まったんです。大学はもう爆弾で焼かれたあとで、講堂も何もダメに
なっているときです。

——被災は四月でした。

西　ここではやれなくて、向こうへ集まれといったんです。

——もっとも大講堂なんかは残っていたんですね。

西　大講堂は穴が開いて、雨が漏ってダメだった。(笑)もと図書館にいた人が階段の右側に防空壕を掘ったり、いまの五号館の下の校庭に三角の穴が掘ってあり、後に銃を埋めたりしたのですが、学生は集まれなかったんです。そのときは毛塚さんと小沢さんのような若い人にも行ってもらいました。

そのころ私は佐官待遇で田名の部隊長が中佐なんです、黒川といつて私の子供の友人のお父さんなんです。私と黒川中佐だけは別で、大尉が三人ぐらい居たんですが、大尉が拳手の礼をするので、おれはそんな偉いのかなど思いました。(笑)佐官待遇ですといつて、特別にごちそうしてくれました。ああ、そうかなと思ってね。

——平野宣紀先生も将校待遇だったといつておられました。学生は概して評判が良かったようですが、長野県に勤労働員に行った学生が途中で帰ってきたそうですね。

西　長野県はどうか知りませんが、私が聞いたのは和歌山県です。そこは非常に危険なところで、危険だというのに米峰氏が代えてくれなかったというのが問題になったとあとで聞きました。それでストライキになったんだというわけです。

——そのとき荒木さんが和歌山県に行っていたと言うんですね。

西　荒木君も行っていたらしいのです。それで荒木君も米峰氏に反対したらしいですよ。

——荒木さんは今年の春亡くなりました。

西 私 は東京の本所に二、三カ所行きました。それから、田名ぐらいのものでしたね。

——終戦までは学生も苦勞しましたが、先生も付いていつて、いいときもあったとしても、たいへんな苦勞だったと思います。

西 佐官待遇でごちそうを食べさせてくれると、おれはこんなに偉いのかと思うぐらいのことで、あまり樂ではありませんでした。

経国科から経済科を創設

——話が前にさかのぼるんですが、大倉先生の時代に拓殖科というのができましたね。満州開拓か何か。西 あれは二期目だったな。昭和十五年からできたのでしょうか。

——大倉先生の第二期目のときですか。拓殖科開設は十四年の四月となっています。これは十九年から経国科というふうに名前が変わっているんですが。

西 そう、そう。変えたんです。

——拓殖科から経国科に変わったのは、別に意味はなくて、名前が変わっただけですか。

西 拓殖科では通じないんです。その時分満州を經營するという意味で経国という思想があったので、経国科のほうがいいということになったんじゃないですか。これはうろ覚えですよ。拓殖科というのだと開墾だけですけど、満州を經營しなければならぬというので、経国思想がはやったんです。それで経国のほうがよろ

うというので変えたように思っています。

——そういうふうな思想が名前になっちゃったんですか。経済教育科という学科があつたのがなくなっているんですね。

西 さあ、それは知りません。経済というのはありませんでしたよ。経済という名前はぼくが二十一年に付けたんです。それまでは経済という名前はありませんでした。それをぼくが非常に問題にしたのを覚えています。

——経国が専門部の経済科になりますね。

西 経国科を経済科に変えたのは私の責任なんです。その前は経済という言葉は使いませんでした。校友が来て、「先生、ここは文科の学校だ。経済なんていう学科を置くのはおかしいじゃないですか」と責めたので覚えています。経国という言葉は文科的な意味で使ったんです。

私はそのとき、「そんなことをいつても、いま学校は経済学科を置かなければやっていけない。もし悪いことがあつたら、おれが責任を負うから任せろ」と校友の維持員の連中にいったんです。私が責任を負うといつたって、おかしいものですけどね。

もう一ついいことに、経国科で経済をやっていて、あとで小樽高商の教授になった坂口君がいたんです。昭和二十一年三月の初めだったと思いますが、お茶の水女子大が高師のほうに移ったんです。そこで文部省主催の全国大学学長会議があつたんですが、橋本増吉さんがパージになったので、学長の代わりに出ました。初めは学部のほうの話だったんですが、まだ昭和二十一年の三月ですから、いろいろ注意があつて、そのあとで、経済専門

学校関係の人は残ってくれと言われました。

はてな、何をやるんだろうと思っただんですが、残るも何もじつとしていればいいんだから、じつとしていたら経済専門学校のパンフレットを配ってきました。いろいろ聞いていると、学科内容が経国科と同じなんです。帰って帰って、そのときは阪口君も委員をやってくれていたので、阪口君に「どうだい、経済科をつくらないか」と言ったら、「調べてみます」といって、持って帰って調べてくれました。「先生、すぐなりますよ。簿記科が足りないだけです。簿記科さえ入れて、名前を変えればいいんです」と言うので、簿記科を加えて、文部省に申請したら、すぐ許可になりました。先生もみんなそろっているわけです。

試験するほど志望者集まる

許可になったけれども、そのときは三月の末ですから、学生募集をしたのは遅いんです。試験は五月で、二百人募集しました。これは東洋大学の人だからいうけれども、学生募集をして、試験をしなければならないほど志望者が集まったのは初めてです。四百人から五百人近く志望者が集まって、これは試験をしなければならないので試験をしました。私は昭和二年から二十年まで十七、八年もいたけれども、試験をしなければならないほど学生が集まったのは初めてです。そういうおもしろいことがあるんですよ。

——定員は何人だったんですか。

西 二百人です。半分落しました。いまの方は知らないけれども、あっちこっちに学生募集に行ったので、私はそんなことをいうんです。出張先で校友に叱られてね。早稲田などは前に来ましたよ。仙台に行ったときも、

「いまごろ来るなんて。でも、案内しますから」と言われて、雪の中を長靴を借りて一人で募集して歩きました。そのときも叱られて、二度も叱られた。「法政は夏の暑いときに学長が来ました」。私は学長じゃないからね。(笑) さんざんやられたことがあるんです。

——じゃあ、ほかの大学もそうだったんですね。

西 仙台では明治、法政などが来たと言っていました。早稲田などもやっただけでしょう。「とにかくいい学校は早く来ていますのに、なんですか」なんて、さんざんやられて……。東洋は遅いと言っただけです。しかも、学長じゃない。「学長に来いと言ったって、学長は来れないんだ」「いや、わかったよ」なんて、さんざんやられました。そういう時代でしたからね。

だから、学生がそんなにたくさん来るといふのは驚きであり、ありがたかったです。五月に試験をして、入学が七月になったわけです。

——終戦のとき先生はどこにいらしたんですか。

終戦と授業再開へ向けて

西 私は国に帰っていました。私が小僧として育った寺の和尚として、お盆で施餓鬼をやっていたんです。檀家の者もみんな集まっていた、天皇の放送があるというので、勝ち戦さの報告だろうかとわさして、集まって慎重に聞いていたら、あの変な声で……。変な声と言ったら悪いけれども。(笑) びっくりしてしまいました。

——お寺は加悦町にあったんですか。

西 加悦町字温江というところです。

——お寺の名前は？

西 常栖寺です。

——幹事長になりますが、それからまた出てこいということになったんですか。

西 幹事長になったのは昭和二十年七月一日からです。橋本さんが学長でね。私は学長選考委員は十六年ごろからずっとやっていました。だけど、私が幹事長なんかになるというのは夢にも思わなかったんです。来いと言うんですよ。そのとき二之宮君がだいぶ活動していましたね。学長さんが集まれと言うから、なんだろうと思っていたら、「お前、幹事長になれ」と。「幹事長なんて、おれはなれない」と私がいったら、「お前がやらなければ、わしも辞める」と橋本さんがいったんです。選考委員だったんですが、難儀して橋本さんを決めたんですから、これで辞められたらと、ほかの連中にも怒られますしね。そうしたら、二之宮君が「わしが助けるからやれ」と言うんです。そういう関係で七月からなりました。

——すぐ終戦ですね。

西 七月になって、八月十五日ですから、四十日余りで終戦になりました。八月にお盆で帰って、お盆をやっているときに終戦です。それですぐこちらに帰りました。十月から学校を再開しろというのが文部省から来たから、これはたいへんだというのですね。すぐ帰りました。

そのとき大いに助けてくれたのは、加藤猛夫君、小沢君、毛塚君です。まだ戦犯が決まらないときだから、そ

のときは橋本学長もいました。ひとついい学校をつくらうじゃないかといわれましたが、東洋大学を大きくしようという意味で、社会学を設ける、英文学を設けるなんていう案を出したのは橋本さんです。それが橋本さんが学長になる前からの案でした。私の案は、古くから学校に来ておられる先生をみな呼び返そうという案だったんですが、橋高君は田舎へ帰ってしまったていなかつたんです。毛塚君、小沢君、加藤さんがたいへん助けてくれました。橋高君は問題があつて。東大で哲学をやつていて共産主義になった出先生と仲が悪いんですよ。しかし出先生は助けてくれました。あの先生のご紹介で、助教授の小室栄一君（西洋史学）、守屋美都雄（東洋史学）とか古川哲史君（西洋倫理学）、海老原晃（ドイツ語）とか若い優秀な連中を入れたんです。

——十月から授業再開ということなのですが、たいへんだつたでしょうね。先生もなかなか集まらないし、学生だつて住居もないし。

西　でも、わりに来ましたよ。一つは終戦というので、兵隊から帰ってきましたから。戦争の末期はみんな勉強ということにだいい調子が変わっていたんじゃないですか。そういう傾向があつて、学生もわりに学校再開を待っていました。

——さっきの先生は出降ですね。

西　ああ、出降。あの先生が非常に骨を折ってくれて、若い助教授などを……。ところが、橋高氏が山形に行つていて、帰そうとしたら、出さんが絶対に反対だと言うので、困っちゃった。（笑）そういういきさつがあつたので、あとまで響きました。でも、出さんはそのとき頼みにいったら承諾してくれて、出さんには来てもらった

んですけどね。そして十月から来てくれたんですけれども、橘高氏はダメだと言うので、困ったことがあるんです。

——東大が専任で、出先生は兼任で来てくれたわけですね。

西 向こうの教授だから、講師です。東大の研究室に泊まり込みでやっていた先生です。二十一年の四月から、出さんの推薦の若い助教授級を入れたんです。先述の古川、小室、海老原、守屋君等非常に優秀な連中でした。入れたのはいいんですが、「先生、なるべく東洋にいるようにしてくれよ」といったのに、あとではみんな官立大学に取られちゃった。小室君は明治に行ってしまった。「いや、東洋は月給が安い。明治のほうがはるかにいい」とかなんとかいって。(笑)

——小室栄一という西洋史学の先生ですね。

西 あの先生だけは官立に行かなかったんですが、あとの先生はみな官立に取られちゃった。小室君は経済の佐々木哲郎君の近くの荻窪に住んでいます。

——小室栄一先生はずっと長くおられましたね。

西 講師で来てくれました。

——いちおう戦争直後まで来ましたが、そのあとについては、もう一度お話を願いたいと思います。今日は非常に長時間にわたってありがとうございます。

(聞き書き117は『東洋大学史紀要』第1号に掲載)